

# かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311  
FAX 66-1314



春まぢか 開きはじめての小梅

(2月16日 大教会神苑で)

## さあ！おたすけ 祈る 動く つなぐ

おたすけ・お願いカード 集計：59,755枚

平成26年12月21日～平成27年1月20日

累計：671,027枚

一万人のおぢばがえり

集計：642人

平成27年1月1日～1月31日

立教178年  
2月号

大教会長様おはなし

おたすけの感動

・感激を味わおう!

1・20年頭会議において

立教178年、明けましておめでとございます。

昨年中は、年祭活動2年目ということで、1年目に倍しておたすけ活動の上に励もうと誓い合って1年間通りました。

大変有難いことに、次々と不思議自由のご守護を現わしてください、今、この旬は、教祖が普段以上に先頭を切つてたすけ、一条の上にお働きくださっていると感じられた1年目・2年目ではなかったかと、私自身、思っています。

いよいよ3年目・本年は仕上げの年になります。お互いに心を揃えて、仕上げの年に相応しい年になるようにつとめたいと思いますので、どうぞ、よろしくお願い申しあげます。

その上で、改めてこの2年間の動きを振り返ると、先ず、三年千日仕切つ

ての1年目は、「誰でもできるおたすけ」ということで、よふぼくのみならず信者も、そしてそれ以外の方々も「人」としてのおたすけをする——「おたすけの気付き」ということで、1年目の動きにしました。

今まで全く人だすけを考えていなかった人も、先ず「おたすけ・お願いカード」などを始めとして、人のたすけを願う心遣いを多くして、「おたすけの気付き」に邁進したのが1年目でした。

有難いことに、今までしていなかったお願いカードを書いて、一生懸命、神様にお願ひしたところ、書かれた人よりも、むしろ、書いた本人の上に、次々と不思議自由のご守護を見せていただき「この『おたすけ・お願いカード』は大変、有難い」といって、人のたすけを願うことの有難さに気付いたのが、1年目ではなかったでしょうか。

そして2年目は、よふぼくはよふぼくらしい「おたすけの実動」——1回でも多くお願ひづとめをし、また、おさづけを取り次ごう——ということに重きを置いてつとめました。

これも有難いことに、会長さんから

「よふぼくなら、今年は、おさづけを取り次ごう」と言われて帰宅すると主人が倒れて、普段、取り次いでいなかったおさづけを取り次いだ。一度ならず二・三度、倒れたのに、医者から「もうだめ」と言われた主人が、おさづけで守護いただいて結構に通っている。また、たすかったその人が友だち・知人に声を掛け、今、一生懸命、おちばにお誘いしているということもありました。

この2年目の実動によって、本当に有難い教祖のお働きを見せていただきました。

いよいよ3年目・仕上げの年は何かと言えば、こうして実動したその喜びを、今度は、成果という形で親神様・教祖にお喜びいただく3年目にしたいと思ひます。ただ、お働きたいだけではなく、成果という結果をもつて親神様・教祖にお喜びいただくとうことです。

そして、「祈る 動く つなぐ」の3つの実践項目について、3年目のまとめとして申すなら、「祈る」の大きな角目は、「毎日のお願ひづとめ」——自分のためではなく、人のたすかりを

願つて、毎日、1回でも2回でもお願ひづとめをしようということです。

「動く」については、成人目標の一番最後にある「一人ひとりの心定め」——大教会全体や各教会の心定めを受けて、よふぼく・信者一人ひとりが、自分が心定めをして、そしてそれを完遂するために動くということです。

「つなぐ」については「万人のおちばがえり」——一人でも多くおちばにお誘いしよう。そして親神様・教祖にお喜びいただくということですよ。

今年一年は、「祈る 動く つなぐ」、この実践項目の一つひとつ、成人の実践をご守護いただくための実動を、共々に改めてしっかりと心に置きたい。

笠岡大教会として、初席者 298名、おさづけ拝戴者 224名、修養科修了者 147名、教人登録者 132名の心定めを、おちばに提出しています。

昨年の成果からすると、途方もない数字ですが、よふぼく・信者・子どもさん一人ひとりが、「ぼくは、ごどもおちばがえりに友だちを一人誘うんだ」という形で、みんなが我が事として、一人ひとりが「初席者1名」という心



年祭活動仕上げの年にふさわしい  
実動を話される大教会長様

定めをして動いたら、決してできない数字ではありません。

もしも、「今までやったから、今さらいくら心定めしてやってもできない」・「心定めをするのは数字だけで実際にしなくてもいい」というような思いがどこかにあったとするなら、当然、これはできるはずがなく、(心定めというものは)決してそうではありません。

昨年、各教会の心定めを出したとき、ある会長さんが「心定めは出しましたが、できなかったらごめんさい」と

言われました。

「二年間、精一杯やってできなかった」なら分かりますが、心定めを出したそのときに「できなかったらごめん」はおかしいでしょう。

できる・できないではありません。それは、結局、結果の問題、ご守護の世界であって、最初から「できなかったら」という言い訳をしていたのでは、これは心定めにはなりません。

できないことを前提に心定めをするのではなく、何でもどうでもという心を決めて掛かるところに心定めの理があるのですから、よふぼく、信者一人ひとりが、「これだけはさせていたいただきたい」・「これをご守護いただくために、自分ができる精一杯のたすけ一条の御用をさせていただきたい」といつて動くことです。

また、「(数字が)できた」から「心定めが完遂した」のではなく、「心定め」の完遂は「動けたかどうか」です。

だからこそ、「何とか初席者を」・「修養科生を何とか」・「私は、おさづけ拝戴者を」といって、よふぼく、信者一人ひとりが、自分が心定めをして、一年、何でもどうでも、それを「ご守護い

ただけるように動き切り、たすけ一条の上にとめ切るところに「心定め」の完遂があるのです。

「(数字が)できたから完遂できた」・「できなかったら完遂できなかった」というのとは意味が違うということ——心定めは、その(数字≠人作りの)ご守護をいただく動きをするための心定めだということ、皆さん方には、心を置いてつとめていただきたい。

ということは、1年間通しての心定めということですから、「今年は、何でも初席者1名を心定めしよう」と思ったら、早々に初席者1名ができたとしても、心定めした以上は、今度は、次の1名を目指して頑張ろう、また、今年1年、変わらぬ心でつとめようという心になって、結果として、1名が2名にも3名にもなってくるということとです。

重ねて申しますが、1名どころか、「教会で3名」の心定めが、それこそ、10名にも20名にも、大きく繋がってくる結果になってきます。

「数」ではなく「動き」だということと、「心定め完遂」は「1年間、変わらぬ心で通り切る」ということを心に

置いて、ともどもに、成果をもって、親神様・教祖にお喜びいただけるような仕上げの年にしたいと思います。

動き切ったその理でもって、教祖130年祭には、今年の1年の心定めとは別に、大教会として大きな御供・理立てをしようということも、もう既に3年前に申しています。

しっかりとをいがけ・おたすけして動き切ったなら、その中で、必ず、親神様・教祖が大きく働いていただく道筋を見せていただきますので、その額も決してできない数字ではありません。

人間の知恵や力でできるものではありません。親神様・教祖に働いていただいているからこそ、できるのです。

さあ、いよいよ、仕上げの年——今、正に、教祖がたすけ一条の先頭に立ってお働きの御用です。

多くの人が、そのお働きを感じています。まだ、そのお働きを感じていない人は、今から動いても決して遅くはありません。むしろ、今から動いても、必ず、大きなお働きを感じられる1年にできると思います。

合言葉は、もちろん「さあ！おたすけ」ですが、私は、今年1年は「おたすけの感動・感激を味わう1年にしよう」ということを、声を大にして言いたい。

そのためには、動き切らなければ、そのご守護・お働きを感じることはできませんし、動いたら、必ず、おたすけの感動・感激は味わえる1年になるはず。

どうぞ、今年1年、「おたすけの感動・感激を味わおう！」、それを心に置いて、仕上げの年に相応しい1年にしましょう。

《以上要約》

**委員**  
**・直轄委員長研修会**  
 2月2・3日 大教会  
**婦人会**

婦人会笠岡支部(上原きよ枝支部長)は、2月2、3日の両日「委員・直轄委員長研修会」を大教会で開催し、33人が参加した。これは、婦人会本部の年間活動方針を受けて、毎年開催しているもの。研修会では、支部長のお話し、おつ

とめまなび、ねりあい、ひのきしんの時間がもたれた。また、今年5月に開催予定の「婦人会笠岡支部総会」に向けての打合せも行われた。参加した委員らは、年祭活動仕上げの年の躍進を誓い合った。

**タンザニアの孤児達に**  
**トラクターが届く**  
**海外部**

昨年タンザニアを訪問した際、孤児院の子供達が自分たちの食料を作るた



福山港から積み込まれる前の

**衣料物資とトラクターなど**

12月の教区の衣料の救援に合わせてコンテナに積み込むことができた。無事1月末にタンザニアの港に到着し、そして笠岡の用木がお世話している孤児支援施設のNGOの手に渡った。これからこれらのトラクターが子供達にどのように使われていくのか心から楽しみにしている。心寄せ頂き、そして寄贈して頂いたことをこの書面をお借りして心から御礼申し上げます。有難うございました。

めに小さな鋤で荒地を耕している実情を知った。11月の月次祭の後、思い切つて笠岡に繋がる用木信者の方々に現在使用されていらないトラクターや壊れている物、また寄付しても構わない物があればとお話しさせて頂いた結果、3台もの家庭用のトラクターと少し大きめのトラクターが1台集まった。



「天理教からタンザニアの孤児院へ」と書かれたトラクター

今年訪問させて頂いた折には、異国の地で子供達のために活躍しているトラクターの写真を撮って帰り、改めて皆様に報告したいと思っています。

(海外部長 上原志郎)

**計報**

**岡崎和夫氏**

大教会幹部承事・弥高山分教会会長  
十二月十三日出直されました。  
享年 七十才

**浅野和芳氏**

大教会幹部承事・ひろさと分教会会長  
十二月十七日出直されました。

## 春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原理一慎んで申し上げます

親神様には一列子供の陽気ぐらしを楽しみに この世と人間を御創造おはじめ下されお育て下さっております 加えて天保九年にはこの世の表にお現れになり 万一切を明かし陽気ぐらしへ向かうひながたをお示し下されたばかりでなく 明治二十年一列子供が陽気ぐらし建設の用材である事に気付くように よふぼく一人ひとりの成人を促す上から 教祖の御身をお隠しにされました事は厳しくも勿体ない極みでございます 私共はこの思いにお応えすべく 日々は朝夕に御礼申し上げつつ陽気ぐらし実現を目指したすけ一条の御用の上に勤め励ませて頂いております

その中にもこの月二十六日は教祖が世界ろくぢに踏み均しに出られた尊い日に当たり おぢばでは春の大祭が執り行われますので 理のお許しを戴いて当教会にても只今からおつとめ奉仕人一同 明治二十年の親心に思いを致したすけ心も一人に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行わせて頂きます 御前には寒さ厳しき中も厭いませず 今日の日を楽しみに寄り集いました道の子供達が 相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げると共に五万九千七百五十五枚のおたすけお願ひカードに我が心を添えて人の助かりを願う皆の真実の状を御覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて本日は世話人の島村廣義先生にお越し頂いております 後程お話を聞かせ頂きますので時句に当たつてのおぢばの声と受け止めさせて頂き 本年年祭活動仕上げる年に相応しい成人の歩みに繋げさせて頂く所存でございます 又今月は 大祭月に当たり 直轄教会への大祭参拝を通して成人目標の徹底を図らせて頂きました 「仕上げの年に相応しい成人の実を指す」べく 毎日のお願いづとめ・一人ひとりの心定め・一人のおぢば帰り等の実動を通して 初席者二九八名 おさづけ拝戴者二四名 修養科修了者一四七名 教人登録者一三三名を御守護頂けるよう たすけ一条の成人の歩みに邁進させて頂く覚悟でございます そして全教会でおつとめ奉仕人の増員を果たしたいと存じます

何卒親神様には教祖年祭を目指して我が身思案を捨て 親孝心一筋にたすけ一条の成人の歩みを進める皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけの上に自由の御守護をお現し下さり 親神様の御守護教祖のお働きに浴す人が 弥増して陽気ぐらし実現に向け大きく前進できますよう御守護お導きの程を一同と共に慎んでお願い申し上げます

享年 八十七才

### 友井道雄氏

上川邊分教会長・河佐分教会前会長  
一月三十日出直されました。  
享年 九十八才

### こころの詩

笠岡の教友が選ばれ掲載されてきましたので転載いたします。(敬称略)

#### 『天理時報』

▽2月1日付「時報俳壇」

・苜品◎ 金谷眞佐代さん

寒空にきらら 婚約指輪かな

▽2月15日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡◎ 池田広子さん

朝ごとにプロツコリーの葉を啄つばみて

つがいの鳥が飛び立ちてゆく

・海松ヶ岡◎ 藤井光子さん

「ばあちゃん味の味噌汁飲めばほつ

とする」言ひし五歳も今大学生

▽『陽気』誌二月号「道柳」より転載。

#### ▽秀 詠

・東悠◎ 田林美智子さん

楽しみやおたすけ談義集いの日

#### ▼表紙写真

(吉岡輝昭かさおか編集部員)

立教百七十八年 春季大祭 祭典役割表

控	胡	三	琴	小	す	太	拍	ち	笛	て	お	地	役割		講	扈	祭	
													方	区分				
え	弓	線		鼓	が	鼓	子	ん		を	と	方	坐	話	者	主		
内	今	上	虫	杉	笹	今	谷	森	浅	門	田	大	吉	上	大	高	門	佐
海	川	原	明	原	尾	川	内	本	野	脇	中	教	岡	原	教	木	脇	藤
史	佐	順	好	博	正	昌	伸	忠	明	郁	ます	会	繁	昭	長	昭	元	道
郎	智	子	美	之	治	彦	自	平	教	子	すみ	様	道	祥	様	祥	教	孝
	子	子	美	之	治	彦	自	平	教	子	すみ	様	道	祥	様	祥	教	孝
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山	上	吉
	内	崎	藤	木	崎	野	山	原	岡	山	内	本	村	島	村	田	原	岡
	正	豊	香	素	輝	弘	逸	浩	誠	小	美	富	道	誠	剛	敏	志	壽
	美	子	苗	志	彦	実	郎	浩	一	智	知	美	徳	治	教	教	郎	壽
	武	岡	佐	赤	岡	山	横	上	吉	横	谷	森	中	中	中	山		